

中国語の打撃動詞「捶」「敲」「拍」について

黄麗華

1. はじめに

我々の日常生活においては、手あるいは手に持った道具を勢いよく対象物に接触させて力を加える動作、すなわち「打撃を加える」動作がしばしば行なわれる（もちろん「打撃」と呼ばれる動作がどのような特徴から成りたっているか、ということも重要であるが、ここでは触れない）。このような動作を表す動詞は、中国語にも日本語にも数多く存在する。中国語では、「打」「捶」「敲」「拍」「撃」などがあげられる。本稿ではこのうち、中国語の「捶」(chuí)「敲」(qiāo)「拍」(pāi)をとりあげ、その意味を考える。

なお、中国語文の日本語訳は特にことわらないかぎり、筆者によるものである。

2. 辞書の記述

分析に入る前に、中国、日本で出版されている辞書で「捶」「敲」「拍」がどのように記述されているかを見ておこう。

捶：用拳頭或棒槌打（こぶしまたは棒でたたく）。

敲：在物体上面打、使発声（物体の表面をたたいて音をたてる）。

拍：用手掌打（手のひらでたたく）。

『現代漢語辞典』（商務印書館1979）

捶：①棒でたたく。②槌でつく。③握りこぶしでたたく。

敲：たたく、打つ：指などの先でコツコツと軽くたたく。

拍：（平たいもので軽く）はたく、打つ、たたく。

愛知大学編『中日大辞典』（大修館書店1986）

「捶」「敲」「拍」に限らず、ひとつの動詞が「動作をするのに必要な道具や手段、またその力の強さをもあわせてしめしている」（興水1980、p.80）ことは中国語においてはしばしば見られる。以下、「捶」「敲」「拍」の使い分けに関わっていると思われるいくつかの要因について、用例をあげながら詳しく述べることにする。

3. 分析

3.1. 動作の主体

「捶」「敲」「拍」の動作の主体は、擬人法でないかぎり人間以外のものが動作主になることはない。「椅子がドアにぶつかった」ことを、(1)のように言うことはない。

(1)× 椅子捶／敲／拍門。(椅子がドアをたたく)

擬人法の例は文学作品によく見られる。

(2) 驟雨捶門。(にわか雨が戸をたたく)

(3) 急風敲窓。(突風が窓をたたく)

(4) 惊濤拍岸。(荒波が岸におしよせる)

これらの例では、主語は「にわか雨」「突風」「波」という自然現象である。しかし、いずれも運動する物であり、意志はなくとも「他に対して打撃を加える」ことができるものである。日本語の「たたく」でも、「雨がドアをたたく」などは擬人法とされている(森田1977、p.105)。

3.2. 手段及び対象との接触のしかた

2. でみたように、「捶」は「握りこぶし」あるいは「棒状の物体」を用いて打撃を加えることである。「棒状の物体」というのは例えば、「バット」「太鼓のばち」のようなものである。また「握りこぶし」で打撃を加えるといっても、厳密には、上腕部を振り降ろして「握りこぶし」で打撃を与えるのである。上腕部が「棒」と同等のものとして機能しているわけである。

(5) 張三(用拳頭／×用手指／×用手掌)捶門。(張三は拳／指先／てのひらでドアをたたく)

(6) 張三(用木槌／×用木板)捶衣服。(張三はきぬたの上でたたき棒／板で着物をたたき洗う)

例文中、手段を丸括弧で囲んだところがあるが、2. でも述べたように、中国語の場合は動詞自体に手段に関する情報がすでに含まれているので、あえてそれを明示すると不自然になるのである。以下同様である。

「棒状のもので打撃を加える」ということが「捶」の重要な特徴であるのに対して、「敲」は対象との接触のしかたに重点がおかれる。すなわち、面的な接触ではなく、点的な接触が普通である。手段としては「指」「手の関節」「棒状の物体」などが用いられる。

(7) 張三(用手指尖／×用拳頭／×用手掌)敲門。(張三是指先／こぶし／てのひ

らでドアをノックする)

(8) 張三(用鼓槌／[×]用木板) 敲鼓。(張三はばち／板で太鼓をたたく)

(9) 張三(用鑼板) [×]捶／敲／[×]拍鑼。(張三は板のばちでドラをたたく)

(9)のようにドラをたたき鳴らす時に、先の尖った形をしている「鑼板」を使うこともある。道具は板切れではあるが、打撃を加える時には尖った部分しかドラと接触しないので「点的な接触」になる。よって、(9)の場合は「敲」が適格である。

「拍」も手段そのものより接触のしかたに重点がおかれる。「てのひら」「指の腹全体」あるいは「平たい面を持つ道具」によって打撃を加えることである。「敲」と違って、「面」と「面」とが接触するのが「拍」である。

(10) 張三(用手掌／[×]用拳頭／[×]用手指尖) 拍門。(張三はてのひら／拳／指の先でドアをたたく)

(11) 張三(用球拍／[×]用棒子) 拍乒乓球。(張三はラケット／棒でピンポン玉をつく)

(12) 張三用尺子敲／拍桌子。(張三が定規で机をたたく)

(12)は「定規で机をたたく」ことを表すが、「敲」は「定規の先、へり」で机をたたくことを表すのに対し、「拍」は「定規の平たい部分」で机をたたくことを表す。前者が面的な接触でないのに対し、後者は面的な接触であるといえよう。

また、「雑誌で机をたたく」ことを表すのにも、次の二通りの言い方がある。

(13) 用雑誌拍桌子。(雑誌で机をたたく)

(14) 用雑誌敲 子。(雑誌で机をたたく)

(13)は丸めていない状態の雑誌でパンパンとたたくことを意味するが、(14)は丸めた状態の雑誌でたたくことを意味する^{〈注1〉}。

3.3. 加撃力

ここでいう「加撃力」とは、対象物に対する打撃の強さである(山本1981参照)。

「捶」は普通比較的加撃力の強い動作であるのに対し、「敲」「拍」は比較的加撃力の弱い動作である。「敲」「拍」が指、手首の力だけで打撃を加える動作のこともあるのに対し、「捶」は最低限上腕部を用いる打撃であるから、強い打撃になるのが普通である。

(15) 張三用力地捶／敲／拍門。(張三は力いっぱい門をたたく)

(16) 張三輕々地?捶／敲／拍門。(張三は軽く門をたたく)

このように「敲」「拍」は「用力地」「輕々地」のいずれとも共起するのに対して、

「捶」は「軽々地」とは共起しにくい。ただし、対象が有情物の場合、「捶」は「用力地」「軽々地」のいずれとも共起する。

(17) 用力地捶背。(強く背中をたたく)

(18) 軽々地捶背。(軽く背中をたたく)

対象が有情物の場合、「肩をたたく」などの動作は「こぶしでやんわり」行われることもある。それらの動作は相手に苦痛を与えまいとする配慮が働くからである。

加撃力に関する「捶」「敲」「拍」の特徴は、動作の手段に対する制限に反映される。例えば、「捶」「敲」はともに「棒状の道具」を要求するが、次のように、共起できる手段に違いがある。

(19) 用筷子×捶／敲桌子。(箸で机をたたく)

(20) (用擀面杖)捶／敲桌子。(麺棒で机をたたく)

このように、「箸」のような細い棒で打撃を与える場合「捶」は使えない。「捶」は、「ある程度の太さを持つ棒状の物体」を用いた動作でなければならない。そうでないと、強い打撃を加えることができないからである。

3.4. 対象物の性質

3.2.で動作の手段と様態についてみた。しかし、「捶」「敲」「拍」は、動作の手段と様態だけではなく、対象物の性質についてもそれぞれ制限がある。

まず、「捶」「敲」はともに対象物が硬くなければならないが、「拍」は特に硬い対象物である必要はない。

(21) ×捶／×敲／拍掛着的被子。(ぶらさげて干してある布団をたたく)

(22) ×捶／×敲／拍水面。(水面をたたく)

このように、ぶらさげて干してある「被子」(布団)、「水面」のような硬くない対象物の場合、「捶」「敲」は不自然である。

しかし、ここで対象物の「硬さ」というのは、「捶」の場合あくまで打撃を加えたときに「てごたえ」があるということである。硬度がどの程度であれば「捶」が使えるかという問題ではない。例えば、同じ「布団」でも、ぶらさげて干してある布団と床に敷いてある布団とでは、打撃を加えた際のとごたえは全く異なる。前者の場合、「捶」は用いることはできないが、後者の場合であれば可能である。

一方、「敲」の場合は、「捶」の要求する対象物の硬さとは質が異なる。つまり、「てごたえ」があるというよりも、「コンコン」「トントン」といった軽い音が出るような硬さである。

(23) 捶／[×]敲肚子。(お腹をたたく)

(24) 捶／敲脑袋。(頭をたたく)

「肚子」(腹)は、たたけばある程度の「てごたえ」は感じるが、「コンコン」といった音は出ない。そのため「敲」は使えない。それに対して、「脑袋」(頭)は、たとく「コンコン」という音が出るので「敲」も使えるのである。

「捶」と「敲」の違いはその打撃によって生ずる音にも反映される。「捶」によって出る音は比較的「重い」音である。その音は「哐々々」(tōngtōngtōng)、「冬々々」(dōngdōngdōng)などの擬声語で表される。それに対し、「敲」によって出る音は比較的「軽い」音である。その音は「砰々々」(pēngpēngpēng)、「当々々」(dāngdāngdāng)、「丁々当々」(dīngdīngdāngdāng)、「丁零丁零」(dīnglingdīngling)で表される。

3.5. 触覚及び聴覚との結びつき

対象物に打撃を加えると、触覚的あるいは聴覚的な効果が生じる。

「敲」は音との結びつきが強い動詞である。その場合、音を出すことそのものが目的である場合もあれば、その音を利用して、別の目的をはたすこともある。打楽器をたたいて音を出す場合は前者であり、ドアをノックしたり、ドラをならして時間を知らせたりするのは後者である。

「敲」において「聴覚」に重点が置かれるとすれば、「拍」は「触覚」に重点が置かれる動詞である。中国語では、西瓜をたたいて熟しているかどうかをみることを表すのに、「敲西瓜」「拍西瓜」を使い分ける。前者は「音」で判断し、後者は「手ざわり」で判断することを意味する。

(25) 母親轻轻地拍了拍孩子的小脸蛋。(母親は軽く子供の頬をたたいた)

(26) 社長拍着小王的肩膀说：“干得不错！”(社長はボンと王さんの肩をたたいて、「よくやってくれたね!」とほめた)

(25)には母親がわが子を可愛がる気持ち、(26)には社長が社員に対する親しみが含まれている。このような「拍」のニュアンスも、触覚に重点がおかれることの反映であろう^{〔注2〕}。

4. まとめ

以上の考察を次のようにまとめる。

捶：対象物に拳あるいはある程度の太さを持つ棒状の道具で勢いよく打撃を加えること。打撃の際に「てごたえ」がなければならない。

敲：硬質の対象物に棒状のもので点的に打撃を加えること。

拍：対象物に平たい面を持つもので打撃を加えること。

注

- 1 ここでの「点」と「面」の区別はあくまで人間の認識の問題で、どのくらいの面積の平面があれば「面」といえるかという客観的な基準があるわけではない。
- 2 諸橋轍次『大漢和辞典』によると、「拍」には「なでる」「愛する」という意味があったという。

／引用文献／

愛知大学中日大辞典編纂処編1986 『中日大辞典増訂版』大修館書店

興水 優1980 『中国語基本語ノート』大修館書店

中国科学院語言研究所編1979 『現代漢語詞典』商務印書館

森田良行1977 『基礎日本語1』角川書店

山本清隆1981 「うつ・なぐる・ぶつ・たたく・はたく（はる・ひっぱたくなど）」
『日本語研究』第4号

言語経歴 1957年中国浙江省蒼南生れ 0～3歳 蒼南
3～20歳 山西省太谷県 20～25歳 西安市
25～26歳 北京市 26～27歳 西安市
27～28歳 群馬県藤岡市 28歳～ 東京都港区

（東京都立大学大学院学生）